

# 故郷の記憶とローカル・アイデンティティ

## —福島県富岡町おだがいさま FM の事例から—

水沼 ひかり

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、各地に甚大な被害をもたらした。それに伴い、岩手県、宮城県、福島県、茨城県の沿岸部を中心に臨時災害放送局が新たに30局開局し、ライフラインが寸断された被災地に向けて、地域密着の情報発信が行われた。これらの臨時災害放送局の中には、閉局した局、コミュニティFMに移行、あるいは戻った局もあるが、2016年4月現在で6局が放送を継続している。当初の被災、避難生活に直結する情報発信から、中期的な放送継続により、復興、コミュニティの再生の一助へと変化している。

本稿では、福島県富岡町の臨時災害放送局「おだがいさま FM」に焦点を当てる。富岡町は東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故により、全町域が避難指示区域に指定されており、町民は47都道府県及び、国外に離散した状態にある。おだがいさま FM は役場機能のある郡山市で開局、放送を継続しており、国内、国外からも聴取可能である。東日本大震災を機に開局した臨時災害放送局の中でも、避難先で放送しているのはおだがいさま FM のみであり、全国に離散する避難者に向けて放送をしているという点においても、おだがいさま FM は特異な存在である。

卒業論文において、筆者はおだがいさま FM が、離散している町民のローカル・アイデンティティを維持、再認識しているという考察を、発信者側の視点から行った。本稿では、発信者側に加えて受信者側の調査を行い、集合的記憶の理論を援用した上で強制的避難が町民の記憶とアイデンティティに何をもちたか、またその記憶とアイデンティティにおだがいさま FM がどう関わるか。そのメカニズムを明らかにする。

おだがいさま FM の先行研究及び筆者の卒業論文においては方言が扱われ、離散した町民に集団性とアイデンティティをもたらすことが論じられている。本稿においては、方言も記憶を想起させる要素の一つとして扱うだけでなく、富岡町の正午を報するサイレンとして流れていた

町民歌「富岡わがまち」を用いている。

さらに、本稿ではアルヴァックス(1950=2010)が提示した「集合的記憶」の理論を用いている。アルヴァックスは「人が思い出すのは、自分をひとつないし多くの集団の観点に身を置き、そしてひとつないし多くの集合的思考の流れの中に自分を置き直してみるという条件においてである」と述べ、集団によって記憶が構築、制約されることを明らかにした。さらに大野(2000)はこの集合的記憶を、「集团的記憶」、「社会的記憶」、「歴史的記憶」の3つに分類し、本稿ではその一つの「集团的記憶」を扱う。

第4章の発信者側の調査では、おだがいさまFMスタッフへの聞き取り調査、番組内容分析から、記憶とアイデンティティの考察を行った。スタッフは方言消滅を危惧しており、内容分析から方言の維持、再生に努めていると分析した。おだがいさまFMの立地やスタジオ内の構造、富岡町民または所縁のある人物のパーソナリティーの起用により、リスナーにとって身近で親しみやすいラジオが実現されている。

第5章の受信者側の調査においては、おだがいさまFMの富岡町民リスナーへの聞き取り調査、アンケート調査から、おだがいさまFMの聴取状況を把握し、富岡町、東日本大震災の状況と照らし合わせて考察した。さらに比較対象として、非リスナーへの調査も行った。おだがいさまFMリスナーには聴取のサイクルがあり、常に町のことを考えており、おだがいさまFMの聴取により、さらに町のことを忘れないという循環があることが分かった。アンケート調査においても、「自分は富岡町民だと感じる」の回答が無かったことから、常にアイデンティティを保っており、おだがいさまFM聴取により、さらに維持、再認識されている。おだがいさまFMはローカル・アイデンティティの持続装置の役割を果たしているのである。さらに、町民歌「富岡わがまち」を耳にすることで、震災前の景色、行為が想起され、日常的、恒例的だった行動が結びついていることが分かった。震災後は町民歌「富岡わがまち」を、おだがいさまFMをはじめ、町の行事やサロンにて触れており、震災前の日常を思い出すことで、避難生活により町や家族と引き離された辛さや苦しみを癒していた。

第7章では、調査を踏まえ、故郷がどう認識され、アイデンティティを喚起するのか、さらにサウンドスケープの観点から記憶にどう結びつくのかに焦点を当て、富岡町、おだがいさまFMと照らし合わせている。富岡町民は、避難生活により富岡町を故郷と認識すると同時に記憶の個別化が生じ、記憶の空白化、アイデンティティの非連続から、避難の後ろめたさや生活の喪失を感じている。しかし、おだがいさまFMリスナーは聴取により日常的に町を考え、浸れる機会があり、ローカル・アイデンティティが保たれているため、ノスタルジアの現象は生じていないことが分かった。また、サウンドスケープの観点において、方言と町民歌「富岡わがまち」は、富岡町の標識音とし

ておだがいさま FM により震災後もサウンドスケープとして保たれ、地域の記憶とアイデンティティを呼び起こし、避難生活における後ろめたさや喪失感を癒している。特に町民歌「富岡わがまち」は、地理的境界線と時間的境界線が明確なことから、より直接的に富岡町民の記憶とローカル・アイデンティティに働きかけている。

空白化した記憶を埋め、ローカル・アイデンティティの連続の確保により、離散し個別化した町民の記憶は、富岡町の帰還により個人が集合することで再び集団的記憶として再構築されるであろう。以上より、おだがいさま FM は、町の記憶を「保持」したい町民のための記憶装置であり、空白化した記憶を埋める補完的役割、ローカル・アイデンティティの紐帶的役割を果たしている。